

ふるさと歴史シンポジウム

# 「いまよみがえる末松廃寺」

パネルディスカッションの記録

2010

野 々 市 町

野々市町教育委員会

## ●例 言

- 1 この冊子は、平成21（2009）年11月15日に開催した「ふるさと歴史シンポジウム「いまよみがえる末松廃寺」」におけるパネルディスカッションの記録として作成しました。
- 2 このシンポジウムは、平成21年度文化庁町内埋蔵文化財保存活用整備事業国庫補助金の交付を受けて開催しました。
- 3 シンポジウム当日に参加された皆様に配布した資料集は、野々市町のホームページ上（下記URL参照）において、閲覧、ダウンロードが可能となっておりますのであわせてご利用ください。

<http://www.town.nonoichi.lg.jp/bunkashinko/sinpojiumu.html>

- 4 シンポジウムの開催、当日資料集作成に際しまして、多くの方々のご指導、ご協力を賜りました。記してお礼申し上げます。

木立雅朗、金田章裕、高村 宏、田嶋明人、服藤早苗、村上 詠一、望月精司  
谷内尾晋司、吉岡康暢

石川県教育委員会、石川県史跡整備市町協議会、石川考古学研究会、金沢放送局

## ●パネリスト（基調講演・報告者ほかのみなさん）略歴（報告順）

金田 章裕（きんだ あきひろ）

専門：歴史地理学 1946年富山県生まれ

現職：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構長

主な著書：『条里と村落の歴史地理学的研究』（大明堂）／『古代景観史の探求』（吉川弘文館）／『古地図からみた古代日本』（中央公論社）

村上 詠一（むらかみ じんいち）

専門：日本建築史、文化財保存 1941年大阪府生まれ

現職：公益財団法人 文化財建造物保存技術協会審議役

主な著書：「歴史的町並みの保存」『新建築学大系50』（彰国社）／「霊廟建築」『日本の美術』（至文堂）／『日本文化のかたち百科』（岩波書店）

木立 雅朗（きだち まさあき）

専門：考古技術史 1960年七尾市生まれ

現職：立命館大学文学部教授

主な著書：「加賀・能登の古代仏教遺跡－瓦研究偏重からの脱皮と『堂』・山寺の評価によ  
せて－」『北陸古代土器研究』第10号（北陸古代土器研究会）／「瓦範についての覚書」『明  
日をつなぐ道』（高橋美久二先生追悼文集刊行会）／「須恵器坏類の製作実験ノート2－  
ヘラ起こし技法による丸底化と「正円の沈線」をめぐって－」『吾々の考古学』（和田晴吾  
先生還暦記念論文集刊行会）

望月 精司（もちづき せいじ）

専門：考古古代史 1960年宮城県生まれ

現職：小松市教育委員会埋蔵文化財センター所長

主な著書：「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落～移民系煮炊具と竪穴建物構造、  
集落経営の視点から～」『日本考古学』第23号（日本考古学会）／「日本海地域の古代土  
器生産」『日本海域歴史大系』第二巻 古代篇Ⅱ（清文堂出版）／「北陸・信越地域の土器」  
『考古資料大観』3巻（弥生・古墳時代 土器Ⅲ）（小学館）

服藤 早苗（ふくとう さなえ）

専門：日本史、家族史、女性史、ジェンダー論 1947年愛媛県生まれ

現職：埼玉学園大学人間学部教授（学部長）

主な著書：『平安王朝社会のジェンダー』（校倉書房）／『平安朝 女の生き方』（小学  
館）／『平安王朝の子どもたち』（吉川弘文館）

吉岡 康暢（よしおか やすのぶ） コーディネーター

専門：陶磁社会史 1934年金沢市生まれ

現職：国立歴史民俗博物館名誉教授

主な著書：『中世須恵器の研究』（吉川弘文館）／『新修国分寺の研究3』（共著・吉川弘文  
館）／『琉球出土陶磁社会史研究』（真陽社）

# ふるさと歴史シンポジウム「いまよみがえる末松廃寺」

## パネルディスカッションの記録

司会者 お待たせいたしました。それではこれより「いまよみがえる末松廃寺」と題しまして、パネルディスカッションを開催いたします。これよりの進行は、吉岡先生にバトンタッチさせていただきます。それでは吉岡先生、よろしくお願いいたします。

吉岡 午前中から文献、考古、そして建築、歴史、地理と、非常に広い分野の専門の先生方から、現在の社会、文化にもつながるような視点で興味深いお話をうかがってまいりました。それを受けて若干、皆さんと一緒に末松廃寺をテーマにしながら考えてまいりたいと思います。

末松廃寺は660年から70年ごろ、つまり天智政権ですね、に建て始められました。いつまでかかったかというのは、はっきりはいたしませんけれども、完成したとすれば少なくとも10年くらいはかかっていたということであります。

話に入ります前に、まず末松廃寺の建てられる時代背景として、木立さんからお話もありましたけれども、極めて緊迫した東アジアの政治状況の中で建てられているというお話がありました。これは朝鮮半島三

国が、唐という非常に強大な集権国家が成立いたしますのを受けて、それに向かって各国も法治国家の確立に向けて制度の整備が急ピッチで進んでくるわけですね。そういう中で、従来日本と親交の深かった百済、これが663年の白村江、現在の扶余であります、そこへ流れる川の河口で2万7000という大軍を送り込んだにも関わらず、唐・新羅連合軍に大敗をするという大変ショッキングな事件が、天武、天智が実権を握りましてから2年目に起こるわけなのです。そういう国際的な緊迫感が高まっていた。そういう緊迫感の中で、天智政権の後半には、もう飛鳥にはいられなくなる、これは危ないぞというわけで、琵琶湖の南岸の大津に都を移さざるを得なくなる、という状況も生まれてくるわけがあります。



Fig-1



Fig-2

そういう中で従来の半島経営という、大きな日本の先進的な技術、人、モノ、そういうものを受け入れて発展をしてまいりました、いわば外交に重心を置いた政治から内政重視へとようにスイッチを切り替えていかなければいけない。律令国家を目指してなんとか東アジアの中で、ひとつの独立国として成り立っていかなければいけないという動きが加速されてくるわけですね。

そういうひとつの表れが、この越前、あるいは手取扇状地<sup>てどり</sup>の国家的な開発プロジェクトであったらうということになります。問題は多々あるわけでありましてけれども、末松のお寺は今、村上さんのお話をうかがっていると、伽藍の構造でも大きな特色が、特にその塔が巨大な塔だったという問題がありますね。従来私どもは、石田茂作さんの説で、塔の心礎がありますね。塔というのは17本の柱で立ち上げるわけですが、その中心の一番太い柱を受ける、その心礎に掘られているほぞ穴が60センチほどなのですね。その40倍が塔の高さだというように言われてきました。そうすると24メートルということなのですが、これはよろしいのでしょうか。

村上 大変見にくくて恐縮ですが、現在ある五重塔は、時代はいろいろありますが、比べてみますと、今ここにあるのが興福寺の五重塔です。だいたいこのてっぺんまで50メートルあります。だいたい150尺ですね。ここにありますが薬師寺と法隆寺です。法隆寺の五重塔は30メートル、薬師寺の三重塔でも30メートルで約100尺あります。三重塔は非常に低くて24メートルであります。ですから70尺とかそのくらいのものが現実に建っております。

私どももどういう基準を考えたらいいか、心礎の穴ではなくて、どう考えたらいいかということで一度整理してみました。そうするとやはり、この基壇の平面の大きさが高さに影響してくるのではないか。平面が小さいとやはり低いものを意識しているし、平面を大きく取るということは、高い塔を意識しているということで、興福寺の五重塔は非常に平面が大きい。それで150尺あるだろう。

整理しますと、だいたいこの平面の6倍ほどが全体の高さになっています。ただ法隆寺などは5倍くらいです。そうすると、やはり古い建物は平面に対してわりと低く、ごつい安定感のある五重塔が建つだろう。これは室町時代ですから、年代が下がるにつれて平面に対して高く、ひょろっとした五重塔が建っていたであろうということが想像できます。ですから一般の五重塔はだいたい法隆寺程度で100尺、それから興福寺のように非常に大規模な、皆さんご存知の京都の東寺の塔は、日本で今一番高い塔です。あれがだいたい50メートルで150尺ございます。そういうことで、一番向こうに高いのがあります。100メートルと書いていますが、これは東大寺の七重塔です。これが記録によりますと300尺です。これもだいたい平面に比べて6倍の大きさになっています。ですから、そう考えるのが一番いいのではないかと思います。

末松は平面が36尺で10メートルほどですから、だいたい200尺くらいの塔があったのではないかと思います。まあそれは、いろいろあります。平面によって低いものもありますので、五重塔と考えるもいいですし、だいたい200尺前後の塔があったのではないかということを考えています。

東大寺の七重塔で100メートルと言いますが、東京タワーがだいたい333メートルありますから、その3分の1くらいというように考えていただければいいと思います。ただ心柱の穴の40倍という話がありますが、確かに法隆寺を見ますと、現在一部ですけれども心柱が残っています。それを見るとやはり38倍くらいです。ただ京都の醍醐寺へ行くと50倍ありますし、室生寺の五重塔では42倍。ですから40倍から50倍というのが、ひとつの目安になると思います。

末松の場合をどう考えるかといいますと、多分あの礎石の穴は、古い時は礎石というのは、3メートルくらい地下に埋めて掘立柱になっているのです。7世紀後半になるとちょっと上がってきて1～2メートル下に心礎があって、まだ掘立柱です。8世紀になると上にあがってくるというような傾向にあります。ですから上にあがってしまうとおそらく、これを柱としますと、ほぞを作りまして、心礎の穴になっています。末松の心礎も平らな部分があります。多分この心柱のほぞの穴かも分からない。ですから心礎の穴だけで物事を判断するのはやっぱり少し危険ではないかと思います。この穴で末松廢寺の塔を考えますと、やっぱり三重塔級の建物にしかならない。そのためにあんな大きな平面の基壇を作るということはおかしいので、完成したかどうかというのはちょっと問題が残りますけれど、完成したとしたら七重塔ではないかということになります。

吉岡 そうしますと24メートルじゃなくて、ひとつの目途としては七重塔とすれば何メートルくらいでしょうか。

村上 200尺ですから60メートルくらいです。



Fig-3



Fig-4 塔心礎

吉岡 すごい高層建築になりますね。

村上 ですからあの復元模型をご覧になっても、金堂に比べて非常に高いですね。そういうように想像できるということです。

吉岡 ええ。



Fig-5 末松廃寺跡復元模型（野々市町文化会館蔵）

村上 あれだけの広い平面のものを作っているということは、やはり高いものを意識していると考えられます。

吉岡 はい。手取扇状地のどこから見晴らしてもみえるということですね。

村上 そうということです。まあシンボリックなところもあるのでしょうか。

吉岡 どうもありがとうございました。そういたしますと、何でそんな大きな塔を作ったのかということになるのですけれども。まあ、このへんはなかなか、しっかりした答えは出ないかと思うのですが。

それから金堂については木立さんのお話では、2万枚くらいの瓦はやはり必要だろうということでしたね。そうするとこれも大変な、量的にも、それから高層建築を建てるという技術的にも非常に高いレベルのものがそこに投入されているということは、もう間違いのないわけであります。

あと講堂とか僧坊ですね。これはやはり、今のところなかったかもしれませんね。

村上 そうですね。一生懸命発掘しましたがけれども、発掘し足りないのかも分かりませんね。

吉岡 これは今後の研究課題として残ることにはなりますけれども。

ただ僧坊は見つかってはいませんが、あの末松のお寺でお坊さんがいて、そしていろんな法要をおこなったり、セレモニーをやり、そしてお祈りをしていた。こ

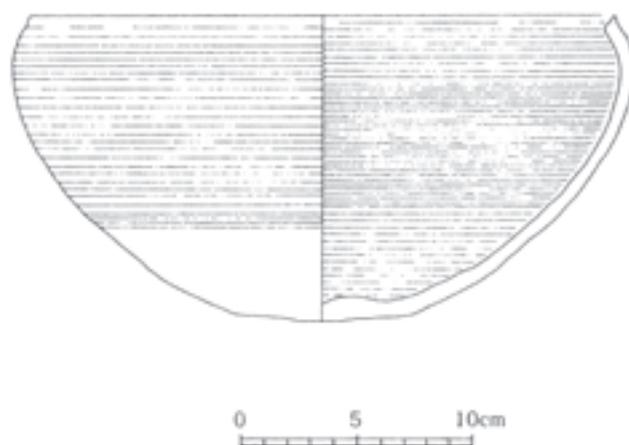


Fig-6 鉄鉢実測図

これはもう確かなのですね。なぜそんなことが言えるかといいますと、資料の13ページをご覧ください。そこの右側の方に鉄鉢と書いたものがあります。現在でもお坊さんが冬の修行で回って歩く時の、供物を受ける鉢がありますね、ご存知だろうと思いますけれども。昔もやはりいろいろな供物を入れてお供えをしたわけですけども、こういう鉄鉢が何点も出ています。特に他では例のない、これに近い、もう少し背の低いものですが、銅のお椀、銅椀ですね。これは半島から直接、仏具として渡ってきたものですが、そういうものが出ています。

それから油坏といいまして油煙痕がついたもの、火を灯した須恵器ですね。そういうものが出土している。これは一般の集落からは出土しません。一般の方は竪穴建物、あるいは掘立柱建物に8世紀の半ば頃に建物が変わっても、夕方から働いて帰れば真っ暗闇の中で暮らしをいたしますので、こういう灯明の道具がまとまって末松に出るということは、これはもう仏事が行われていたというひとつの証拠になります。

また硯もあまり立派なものは今のところ見つかっていませんけれども、写経する時に使ったようなものも何点も出ていますということで、宗教活動が行われたことは確かなのですね。

それで木立さん、なかなか難しい問題なのですが、こういう技術者あるいはお坊さんがどこからやって来ないと、このお寺は建てられなかったわけなのです。先ほどお話のた飛鳥の川原寺の瓦の文様と末松廃寺の瓦の文様の外縁部の鋸子文とっているような、似ている文様があるような気もするのですけれども、そのあたりはいかがでしょうか。

木立 似ていると言われれば似ているのですけれども、向こうは面違いといって、面を違えていますので線ではないのです。末松のものは線になっていますし、しかも二重になっているということを考えると、かなりオリジナルだと思います。いくつか探しましたがモデルになるものは何もなくて、おそらく瓦から瓦を写したというよりも、何か仏具の中にある模様を写したのだらうと思います。その仏具そのものは、すでに失われているのではないかと思います。

吉岡 そうしますと全国のお寺で、中央からストレートにこの瓦の模様をモデルにしたものと、末松のように非常にローカルな地域色の強い、ある意味ではこの野々市のアイデンティティを表現したのかとも思われなくもないものが出てくるわけなのです。

そういう末松廃寺がなぜ末松に最初に建てられるようになったのか。これもなかなか



Fig-7

か難しい問題ではありますけれども、どうでしょうか。これはどなたからでも結構なのですから、木立さんの方がよろしいでしょうか。いくつかのことが考えられるかなという気がいたしますけれども。

木立 今までの話で共通するのは、ここが空いていたということです。土地が空いていたので、新規開発ができる余地があったという考え方がまずひとつあります。

注意しないといけないのは、やはり自由になる土地というのは、もうほとんど残っていません。ですから例え空いていても、誰かの許可を取らないと入れない。これは国家的なプロジェクトであったり、地元がOKを出すなり、何かしないと、おそらく自由にならなかったはずですので、その国家的プロジェクトとして空き地に無理やり入ってきたというよりは、やはりそれに呼応する地元の呼び込み、来て欲しいということもあったと考えられます。

これは推測に過ぎませんが、大きな形の国家的なプロジェクトとして上から単純に降ってきたとだけ考えたのでは、末松廃寺がその後地域の拠点になっていく過程が今ひとつぼけるのかなという気もします。

吉岡 末松廃寺と前後して建てられたと考えられている北陸で一番古いお寺が3つ、候補に挙げられていますね。そのひとつが武生、越前の武生。それから越中の伏木にあるわけなのですが、この2つと末松廃寺のお寺を比べると、その後の展開の仕方が随分違いますね。

木立 全く違うと思いますね。

吉岡 はあ。

木立 その2つは先生も多分お考えの通りで、いわゆる郡といわれるような地域の行政の中心地になると思うのです。今でいうと県庁のようなものが置かれてきて、それが後の国衙に成長していくという、まさしくそういった場所だと思います。その場所は実は伝統的でもありながら、ある段階ではちょっと干されていたのが、国家戦略にのっとって地元が呼応して国の中心になっていく。末松の場合は、そういった伝統的なことも何もない。確かに開発はされていくのだけでも、いわゆる国の郡という形のものでもない、というところがちょっと違うと思います。

吉岡 はい。武生には紫式部もお父さんが国司になって一緒に来たこともあるくらいですから。これは越前の国府、長い間このあたりも越前の武生の管轄下に、平安時代の初めまであっ

たわけですね。それから伏木の方はこれまた越中の国府が置かれ、国分寺も建てられ、文字通り政治経済文化の中心で、そのあたりの違いというのは末松の場合には特色があるというように考えられるわけです。

その他、他の方でこの末松が選ばれるという理由付けは何か考えられるでしょうか。金田先生、扇央部の扇状地でも地下水の低い、用水を引かないと開発できないというところが末松なのですけれども、そんな点で用水をどこからどう引いたかちょっと難しい問題ですが、例えば今の郷用水にあたるような昔の大きな川の分流から用水を引いたというような技術の段階で、7世紀は考えられるでしょうか。

**金田** ご質問の件ですけど、正直なところすぐにお答えは難しいのですけれども。ちょっとお茶を濁すために他のことを申し上げますと、先ほどから天智朝、つまり近江朝ですが、大陸との緊張関係の中で内政を重視するという観点に変わったか、あるいは変わらざるをえなかったかというご指摘がありました。私もその通りだと考えております。特に近江に都を造って、その時に愛発の関を始めるとする、いわゆる三関と呼ばれる近江とその東南というか周囲ですね、3つの関所を造って、それが中国式の畿内というような形になると思います。実は3つじゃなくて、もうひとつ天智は大阪と奈良の境界にある高安城という生駒の南の方のところですが、その山城も手入れを随分丹念に何回もやっております。ちょうどその4つを結ぶとだいたい半径50キロほどになるのですが、それが難波豊碕宮の半径50キロくらいの畿内のスタートの段階とほぼ一緒でありますので、そういう形で近江を中心にした古代の国家体制を作っていると思うのです。

その時に非常に重要視したと思われませんが、東側の地域ですね。東国ですが。東国の開拓と統治に非常に労力を使っております。一番重視しているのは東山道です。近江から美濃、信濃と行って、今の現在の東北地方、陸奥付近まで全部至る部分です。実はそれとほぼ平行に、若狭はちょっと別格ですが、越前があって、それで越中があって越後があるという形ですね。特に日本海側の方は水運が使えますので、その面で非常に重要なルートであったということになると思います。そこへ近江もそうですし、東国各地に大変大量の移住者集団、先ほどの言葉でいきますと、例えば百済からの亡命の難民たちを入植させるということ、政治的にも積極的にやっているわけです。だからそういった流れで東国の各地を重要視するというのは、十分あったであろうというように考えます。

その段階の660年代、70年頃というその時期に、後の越前の国の中心になる武生付近、それから加賀の中心、それもまだ越前の国ですけれども、加賀の中心的な位置、場所からいえば完全に中心ですが、この末松の位置、そして越中の国の国府が置かれることになります。越中の国はついたり離れたりしておりますが、能登を含めて越中の国であったという時期も随分長いわけです。例えば大伴家持の時期などというのは、ちょうど先ほど紹介した東大寺

の莊園などを盛んに作る時期ですが、その時期などの越中の国というのは能登を含んでおりますので、非常に広大な範囲です。それが越前、それから越中であつたわけでありまして。だからそういう時期のそれぞれの地域的なまとまり、まだ完全に形は整っていなかったかもしれないけれども、完全な地域的なまとまりの中のどこかに、そういう拠点的な配置をするという発想は十分あつたというようには思っております。

ただそのうちのひとつが、それではなぜ末松であつて松任ではなかつたのか、そこはまだちょっと分からないわけでありまして。ただし全体としてなんとなくそういう配置を考えていたということは、当然当時の治世者の戦略感というのがあると思ひますので、それは大いにありうることだろうと思ひております。ちょっとはぐらかしたようなお話で申し訳ございません。

**吉岡** いえいえ。61ページの地図を開いていただきますと、末松の大寺の周りというのはご覧のように黒く塗りつぶした7世紀の前半代の村、これはあまり規模は大きくないと思うのですが、これが先にまず入植して、地元からの入植が中心かとは思ひますが、それが開墾の鋤を振るつていたということなのですね。そしてその末松を中心にしただいたい3キロ圏くらいになりますでしょうか、それぐらいのまとまりが周りにあつて、そしてその真ん中にちょうど、これは空き地だと思ひますけれども、末松のお寺が建てられたということになってまいります。

しかしどう考えても、先ほど地元の誘致という木立さんのお話もありましたけれども、地元で武生や伏木のような大豪族がいて誘致活動をやつたというような形跡は、今のところ乏しいと言わざるを得ないという気はしてあります。

それから今、金田さんの用水の紹介がありましたけれども、だいたい奈良時代の中頃以降の東大寺などが積極的に越中などの開墾をやりますけれども、そのときの用水の規模と同様のものが、この末松のお寺の東側のもう一本、微高地といひますか、そこの調査で望月さんのお話にあつた外来の移民がぽつぽつと小さな村をいくつも連続的に島のようになつてゐる微高地の上に作つたところなのです。そこの延長上に100メートル以上の用水を掘削してゐるのですね。そうしてみると、どうも考古学的に考えますと、既に7世紀の後半には単に用水を調節するくらいではなくて、人工的な大溝が造られるという形でひとつの灌漑用水網というものが考えられるのではないかと。そうするとその灌漑用水網の、郷用水のような分流のひとつの取り入れ口のような場所にはならないだらうかと思ひます。これは想像ではあります。他の越前などの開発と比べるといかがでしょうか。

**金田** 越前の場合の用水で一番規模の大きなものとして知られておりますのが、現在の福井市の足羽山のすぐ西にあつた道守の莊、道守村と呼ばれてゐる東大寺の莊園なのです。これ



Fig-8 末松廃寺周辺の古代遺跡（黒丸は7世紀を含む集落、白丸は8～11世紀の集落。報告書より）

は大変大きなものなのですが、それが実は先ほどちょっと紹介しました2700丈ばかりの用水路を持っております。これは九頭竜川の上流の先端に近いところにあたる部分に取水をして、そこからずっと持ってきているというように推定されているわけでありまして、おそらくその推定はあまり無理がないので、また考古学的にとか、歴史の資料として正確に確認をしたというわけではないのですけれど、その推定はほぼ今のところ矛盾がなさそうなのです。非常に大きなもので、そういう用水路を引いているというのは8世紀段階では間違いなくあるわけです。

8世紀段階というのは、律令国家が労働力の徴発のシステムをきちんと整えておりまして、

農業や用水の管理システムを作っておりますので、そういうことが可能であります。東大寺の荘園というのはそういう国家的なシステムを使ってやっておりますので。当時非常に分かりにくいのですが、例えば東大寺でも造東大寺司という立派な役所を作って、その役所が作ったものを東大寺という別の組織に譲っているという、そういうやり方をしておりますので、そのへんが非常に分かりにくいところなのです。

東大寺の荘園でも、例えば先ほど申しました大伴家持が東大寺の墾田地を検定する僧侶が来た時に、その僧侶を迎えて接待をしたり宴会をやったりしているわけです。その宴会は現在と違いまして、昔は公的宴会をやっても、当時の法律上問題はなかったわけでありまして、別に問題はないのですが、そういったこともやっております。その平栄というお坊さんなども、東大寺の荘園などへ出かけているのですが、そういうところは実は東大寺が直轄で経営していたというよりは、そこを現実に大伴家持も巡回に行っておりますので、その時に詠んだ万葉集の歌なども残っております。だから本当に律令国家の政治組織としてそれをやっているわけですから、東大寺の荘園でありながら、当時の国家的な事業規模の開発であります。これが律令国家の公私混同と、我々から見れば思えるシステムですので、ちょっと分かりにくいところがあるかもしれませんが、そういう状態であります。

ただ問題なのは、そのシステムが最終的に確立するのが大宝令ですので、8世紀に入るといことになるのです。それよりもちょっと前の段階にこれは一致しますので、天智朝というのは、それに近いシステムを持っていたと思うのです。そのあたりが文献的にはっきり確認できるというわけではありませんので、ちょっと推定が入るといことになりませんが。当時の地元の豪族の力やそういった強力な人たちがいれば、可能ではあったというように思います。

吉岡 今日望月さんのお話を聞かれて、本当にそんなことがあったのかという感想をお持ちになった方がおられると思うのです。記録には一切ここへ渡来人を含んだような、近江辺りからの人の移民が来て、新しい村建てをして、そして今まで文字通り石と川というこの氾濫原を開いていったというようなことが、たった一行も出てこないのですね。そんな点ではこれは最近の考古学が古代史に新しい問題を投げかけた大きな成果だと思うのです。

そういう用水とともに新しい技術ですね。簡単に言うと鉄の道具なんかを随分たくさん組織的に作るというような、そして



Fig-9

配るといような、そういうことがないとなかなかこの開発は進んでいかない。これについて望月さんどうでしょう。牛馬耕というのがいつからというのは、先ほど平安時代じゃないかというお話もあったのですが。

望月 水田区画の大きさを比較された研究者がおりまして、それは群馬県の事例で、あそこは榛名山の火山灰によって非常に良好に水田の畦畔というか、畦が残っているのですね。それで各時代の畦畔の大きさというか、水田区画の大きさをずっと計っていったら、どうも古墳時代、奈良時代というのはずっと小さいまま推移しているのです。それで飛躍的に大きくなるのは平安時代に入ってからなのです。多分それが牛馬耕の導入と結び付けられるのだろうというように言われているのです。

今日の話でもお話したのですが、氷見市の方で最近、去年ですね、かなり完全な形の馬鍬が出土しました。私も実際に土器を見たのですが、土器の主体は7世紀の前半のものでして、形態からみても7世紀前半でいいだろうというような評価です。それで、ではそういうものがあるから、ここにもそういうものが導入されたのかということ、ちょっと難しい部分があるのかなというようには思います。東日本、特に東国の地域の中でポイント的にそういうものが、新しい技術ですね、そういうものが入ってきた可能性は非常に高いのではないかなというようには思っています。

吉岡 あれは馬が曳いた鍬ですか。

望月 ええ、鍬です。

吉岡 そういうように考えなきゃいけませんかね。

望月 はい。大きさがこのくらいです。

吉岡 そうですね。馬といいますと、三湖台さんこだいの方は鉄の工人がたくさん入り込んでいるのですが、馬具が出土しているのですか。

望月 はい、馬具は出ています。ただ時期がいつなのかというのは、なかなかその、出ている場所が限られた遺構じゃないものですから、いつの馬具なのかとは言えないのですが。鍛冶自体は7世紀の後半には盛んに行っている様子がうかがえますので、その時代にさかのぼってもおかしくはない、というくらいしか言えません。

吉岡 そうですね。今後もう少し<sup>からすき</sup>唐鋤なり、あるいは馬具のようなものが見つかってくればはつきりしますね。

望月 そうです。ただ日本の中でもそんなに量が多いわけではありませんので。古いもので5世紀を遡るようなものもあるというように聞いていますが。あるいは木製の道具ですからなかなか条件が整わないと残らないというものもあると思います。

吉岡 氷見だけぼつん、というのもちょっと、というような気がいたしますが。

末松の界隈は末松のお寺がまず建って、それと同時に進行的に集落が、人が送り込まれてくるといって、あるいは飛鳥時代からそこに開拓していた人たちを巻き込みながら開拓を進行していくわけなのですけれども。その中で集落から馬具が出てきているのです。ところがこの馬具は、今の牛馬耕のような馬とか牛、鞍とかあるいは壺、壺の鐙ですね。壺鐙の引手などです。それから馬の頬につけるようなものじゃないかというようなものもあります。要するにその開墾の当時は馬に乗っていた人がいたわけなのです。

そうなってくると、牛馬耕とは少し離れますけれども、その馬具を出した家というのが特別大きな竪穴建物なのです。そういうところから見ておそらく村の有力者、後の戸籍に郷戸として記されるような、そういう有力者たちというのは、やはり馬に乗って百姓たちが耕すのを指揮し、あるいはいったん急があれば騎馬隊のような兵にもなるというような形で乗馬をするリーダーがいたということは、もうこれはそういうものが出てきていますので、十分考えていいのではないかと思います。

それで開墾が末松から始まったということは、いろいろ理由があると思いますが。今の用水の関係を今後、先ほどお話のあったレーダー探査で調査をしてはいかがでしょうか。これを全部発掘するということはできませんので、町の方で奮発していただいて、ちょっと財政が今苦しいようですがレーダー探査で、これはそんなに高いお金はかかりませんので、発掘で出てきている大溝をずっと、先ほどの富山の久泉遺跡のようにいったいどこまで続く



Fig-10 オサの館（下新庄アラチ遺跡）



fig-11 円面碗（同左）

のか確かめていただけたらと思います。この用水というのは決して灌漑用水だけじゃなくて、手取川、その分流というのは大溝も含めてその大溝の近くに実は渡来系の可能性のある立派な壁立ちの家が建てられており、その用水のすぐ脇に整然と倉庫群が建ち並び、そしてすぐ筋向いのところから立派な硯が出土しているのです。先ほどお話のあった、字を書ける識字層が存在した証です。

これは偶然とは思えないし、その用水からあまり一般の村人が使わないような、大きな瓶もたくさん出ているのです。これはどうも灌漑用水であるとときに、小松のあたりから焼かれた焼き物が現在の相川<sup>そうご</sup>とか、あのあたりの海岸へ持ち込まれて、そこから手取川の分流を伝って逆に開発地の末松周辺を目指して物資が運び込まれ、そういうものを管理していた有力者だった可能性があるのではないかと思います。だから用水は決して灌漑用水だけではなくて、手取川のいわば物流の大きなルートだったのではないかという気もしております。

それでそこで作られていった村というのは、今の61ページのところに出ておりますように上林<sup>かんばやし</sup>、あるいは新庄あたりのブロックと、末松の周りの村が<sup>はやし</sup>拝師郷にあたります。この<sup>はやし</sup>拝師は二字になっていますけれども、奈良時代の初めに中国風に一字を二字に改めて縁起のいい文字にしなさいという政令が出ていまして、加賀の国の加賀も、万葉仮名の香々というように出てきていたのが、そこで初めてよろこびを加える加賀という現在の地名がついたと考えられるわけです。その他味知だとか井手というのはちょっと聞き慣れませんが、中村、笠間、<sup>みんま</sup>三馬、<sup>くらべ</sup>椋部というような現在のこの集落の地名として残っているものが、だいたい奈良時代、7世紀から8世紀、そして平安時代にかけて開墾されて、行政集落として編成をされていったということでありませう。

だいたいひとつの郷が1000人以上、1500人くらいですかね。そうすると手取扇状地の当時の人口が1万人から1万5000人ですから、現在のちょうど10分の1くらいというように考えていただいたらよろしいのではないかと思います。

そこでお寺の方へ戻りますけれども、いったいこのお寺を建てたのはどういう人たちだったのか、ということになってくるわけなのです。お話のあったように、伏見川あたりから北の方、津幡あたりまでを縄張りにしておりました道君という大豪族ですが、この大豪族が無関係とは思えないけれども、直接お寺を建てたとは思えないということなのであります。これは服藤先生、さきほど道君伊羅都売の話が出ましたが、伊羅都売というのは固有名詞ではないわけですね。

**服藤** そうですね。伊羅都売というと万葉集では普通は娘さんという意味なのですね。

**吉岡** そうすると中央の大豪族で、このとき天智の妃をはじめ9人の名前が出てきて、先ほど志貴皇子というのは天智の6番目の皇子ですね、としてこちらの豪族の子どもができたと

いうことも書いてあるわけなのです。その伊羅都売、あれは確か采女は20歳でしたか。10代から30代に奈良時代ではなっていましたか。何か見目麗しき女性をなんとかと書いてあったように思いましたが。

服藤 律令では30歳以下、13歳以上と書いてあります。

吉岡 13歳以上ですね。そうですね。そういう女性のはるばる大津宮へお嫁入りをした。そこには非常に深い政治的な、あるいは女性外交官だったというお話もありました。そういうように道君の大きな影といいますか、それが直接見えてこないのだけでも、何か関わりはありそうですが。

造立の主体としては、木立さん、手取扇状地の、今の手取川、昔の<sup>ひらかがわ</sup>比楽河、これが現在とはだいぶ位置が違いますよね。

木立 今のこの61ページの地図では笠間、下流域は多分笠間あたりの前後が、というかここが大川というのが松任の野本川の南側に、日本海側に書いてありますが、この大川のあたりがもとの古代頃の手取川の本流だったのではないかというように言われているかと思います。それがだんだん南の方に、ワイパーが動くように南に動いていきます。

このワイパーはもう一度戻ってこないといけないのですが、今の手取川のところで、昭和の初期でしたか、近代に大洪水を起こしますが、それをきっかけに徹底的に堤防を高くして絶対に動かなくしますので、今は完全に固定化しました。手取扇状地というのはもうワイパーのように本流がウーンウィーンと北に南にと動いていった。今ちょうど私たちは運良くここで止まっているけれど、大川から今の現在の手取川の間までが、手取川が古代から現在に至るまで動いた軌跡であるということよろしいですか。

吉岡 そうですね。その中でも主流は白山市教育委員会の木田さんが丹念にお調べになって、大慶寺用水と堂尻川の間ぐらいに主流があったと言っておられるのです。

そうすると手取扇状地の西南の3分の1というのは、<sup>たからべのみやつこ</sup>財部造の地盤に近い。

木立 能美古墳群というのが財部造関係だとするならば、当然今の手取川がもっと北にあったわけですから、連続してそこまでは領地に入っていたらというように考えていいと思います。残念ながら今現在のこの手取川によって全部それが削り取られてしまっていて、よく分からないというのが悲しいところですね。

吉岡 そうですね。でも古代では能美郡が後からできますけれども、加賀の国が独立します



Fig-12 金堂跡の瓦堆積

と、能美郡の山上郷というのが現在の手取川の山寄りのところであって、今言われた氾濫原のところにあったわけなのですね。ですから石川平野の3分の1あたりのところへは、その財部造が進出してきていた可能性もあるかなと思います。そして瓦は湯屋窯<sup>ゆのや</sup>からどうなのでしょう。これはどういうコースで運んできたのですか。

木立 コースは何とも言えませんが、普通に考えるといったん鶴来の方まで出て、鶴来を渡ってから北に来た方が、今の鶴来街道を通して北にあがった方が楽なような気はします。ただ、かつての松任市の剣崎遺跡というところで一片だけ、小さなかけらですが、湯屋で焼いた瓦が出土していますので、手取扇状地の意外と真ん中あたり

も通ったのかなという気もします。ちょっと何とも確証がないのですが。

吉岡 ええ、そうですね。いずれにしても、手取川の分流をおそらく運搬にはどこかで使っているような気はしますけどね。

今回報告書を作るにあたりまして、どうも道君というのがよく見えてこない。いろいろなものの流れが、移民にしても瓦にしても、それから心礎にしても南の方角から入ってきている。手取川の水系で江戸時代の学者が、あれは青戸室石だと言ったものですから、ずっとそのまま青戸室石といわれてきたのですが、岩質の先生に調べてもらおうと、いやあれは青戸室石じゃありませんと言われて、どこか手取川の上流域の方へ行ったらそこであんな大きな石の塊が手に入れられたのかな、ということになってきます。

それから南の弓波<sup>ゆなみ</sup>の方へ末松の工人が行っているわけですね。江沼盆地へ。

木立 これもちょっと文献やその他のことで理由はよく分かりませんが、弓波廃寺というのは実は末松から行った瓦だけではなくて、江沼独特のいわゆる紀寺式と呼ばれる瓦も一緒にありますので、どちらかという弓波廃寺そのものが江沼の在地の力と末松の系統の力の両方で、協力して建てているというような感じのお寺です。そして江沼の本家では多分ないだろうと考えています。江沼臣の本家ではない、そういったところに、どうも血縁関係になる

のか分かりませんが、お手伝いに行っているという印象を受けます。

吉岡 これはやはり親密な江沼盆地の有力者と、財部造とすれば関係があったと考えざるを得ないですね。なかなか誰が建てたのかというのは、今の段階では文字資料がはっきりいたしませんので苦しいところがありますけれども、どうも財部造が、おそらく加賀の豪族たちが力を合わせながら国家的なプロジェクトとして、それに参画する形の、よく言われているシンボルタワーというような、開発を目標にやっていくぞというような形で作ったものではないか。このへんは動かないとは思うのです。ただ誰がという特定をしようとする、まだもう少し調べてみる必要もあるということでもあります。

そこでいろいろな問題があるのですが、この創建の末松のお寺につきましては、これが建てられて何年かかって完成したのか、あるいは未完成で途中で終わったのかという問題もあります。だいたい40～50年くらいで瓦葺きのお寺は1回倒壊している。その倒壊した生々しい現場というのはそのまま残っておりまして、17ページをご覧くださいと、瓦がざーっと崩れ落ちたような状態で埋まっていたわけなんです。その奥にある玉石敷きのものは、これは金堂を縮めて建物軸を東へ振った形でもう1回金堂を建て直した、その時の建物の土台に湿気などが来ないようにというようなことで敷きこんだのかと思われま。これは、40～50年くらいで瓦葺き建物が倒壊してしまった、つまり維持されなかったというのは、どう考えたらよろしいですか。どうぞ、村上さん。

村上 瓦はだいたい60年から70年しか持たなくて、修理を重ねて、例えば法隆寺の金堂のように、300年に1回くらい大きな修理をするわけですけども、その間に瓦の葺き直しを何回もやるわけですね。しかしこれは一手ですから、多分修理はなくてもかなり朽ちてきていたのではないかと思います。50年たっていればですね。瓦葺きそのものがということもありますし、修理する、直すという財力、経済力が、やはり修理しながら維持していくというのが今の法隆寺が残ってきた大きな理由なので、そのへんがちょっとどうかと思います。

ただ金堂は確かにこういうようになってはいますが、塔はこういう状態ではないのですね。だから倒壊した後、きれいに整理してしまっ、瓦も廃棄してしまっ建てればそれで問題ないのですが。どうして金堂だけこういうふうに残ったかというのはちょっと疑問も残ります。

吉岡 ええ、そうですね。瓦は埋め殺しのような状態ですね。木立さん、何かこれについてご意見はございますか。

木立 末松廃寺だけを見ていると、このお寺が50年でなくなったとみえますけれども、実は

北陸のお寺全体を見て通しますと瓦を補修するお寺というのは非常に少なく、能登の国分寺といわれるようなお寺とか、あと何か所かしかないと思います。白鳳寺院というのはすごく多いのですが、補修されないというのが北陸の特徴ですので末松だけではない。しかも能登の国分寺といわれるお寺は白鳳時代にできて、後に能登の国分寺に転用されますけれども、間違いなく奉灯を守り続けている。一本柱列であるとか回廊が11世紀ぐらいまで作り続けられていますので、瓦葺きの威厳はもうないけれど、どうもお寺の威厳は保っている。

ですからこの末松廃寺も、瓦葺きの威厳はすでに失われたけれども、この大きい玉石のものが後でこの場所に建つということは、空白があるのかもしれないけれど、地元の方々にとってはここは直さなければいけないという意識を持たせる場所であったということ想像させてくれるように思います。その意味でも能登の国分寺とここも同じような印象を持ちます。

**吉岡** 末松のお寺は調査をするまで、もう倒壊してしまったきりと思われていたのですね。ところがそうじゃなくて、少なくとも9世紀のどこかくらい、平安時代の前半くらいまではお寺として活動していたということがはっきりしたことは、白鳳寺院でここまで調査をしたという全国の例は非常に少ないわけです。その点では調査の非常に大きな一つの成果だというように思っております。

白鳳寺院の瓦葺きの建物が続くか、このように中断するかはちょっと別にしまして、1回奈良時代の初めくらいに、瓦葺きのお寺がそのまま荒廃してしまうというのは、実は全国的な現象なのです。全国的な現象というのは、飛鳥時代にだいたい46寺というような記憶があるのですが、それが白鳳になると550から600のお寺が建てられたわけですから、もう本当のお寺ブームなのです。それが一体何故かというようなこともいろいろ詮索すれば、その裏返しは何故倒れたのかという話にもなってくるのです。ちょっとここは時間もかかりますので端折りますけれども。ひとつの考え方として、お寺が建てられますと墾田、田畑ですね、あるいは奴婢という下層の労働をする人、下働きのようなことをする人、あるいは山もある場合には山野もお寺の財産になる。そういうことで競って建てたという理由のひとつとしては、宗教的なことがまだ十分地方には伝わらないところもあって、経済的な利益といいますか、そういった仏様のいわば従来の神様とあまり変わらないような現世利益的な、そういう考え方でお寺を建てたために、なかなかそれをずっと維持することができなくなったのではないかという理由を挙げている人もおります。

そうなるとなにか少し寂しい末松の大寺ということにもなるのですが。ただこれも見方によってはですけど。中央の天智政権が、さあ、仏教奨励でいきますよ、という号令をかけても、地方の豪族は今の話のように相互にネットワークのような形の深いつながりを持っていて、なかなか中央のお上の言う通りには動かないというしたたかさというか、非常にたくましいものを持っている証拠でもあるかと思われれます。

だいたいそんなところで創建期の末松のお寺については一応締めておきたいと思うのですが。会場の皆さんでいかがでしょう。あまり時間もないのですけれども。ちょっとおふたりほどご質問があればどうぞ。

**質問1** 私は、この地に来てまだ11ヶ月くらいの新参者でございまして、吉岡先生や木立先生のように地元の利がございませんので、ちょっとピントの外れたことを冒頭から申し上げます。吉岡先生のお力添えもありまして、だいぶ時間がたちながらもシンポジウムも開かれ、それから報告書も出された。これは日本の歴史の世界では非常に珍しい大変な功績だと、私は素人ながら感じております。

それで吉岡先生のただ今のお話を聞きましたら、なぜ末松廃寺がこの位置に建ったのかということは大きな謎だろうと思うのですね。こちらの席に座っておりまして答えが出るわけではないのですが。ただ、今日シンポジウムで発表なさった方の話を聞いておりますと、素人なりに拾っていきますと、答えらしきものがありそうでございます。これは私のロマンチックな無責任な見方ですけども。

それはまず、高村先生が発掘前にはあそこに古墳があったとおっしゃいました。手取川の南の方には古墳がありますけれども、北側に古墳があるというのは、私としましては初耳でございます。これは地元の利のある方にご説明をいただく必要がありますけれども。北加賀においては古墳時代が空白になっておりまして、いわばその耕地整理の過程で古墳が失われたということであれば、私は末松廃寺のまわりに古墳があったということになればこれは連続する可能性がある。

それから望月先生がおっしゃった移住民、移民の問題は、これは我々のように戦後の、もしくは明治の中央集権的な軍政的な歴史観、つまり官製の特定教科書で習った人間は、どうしても中央と地方という関係でものを考えるのですが、私は地域史というものに視点を置けば対岸が朝鮮半島、いわゆる中国大陸だったのじゃないか。そこから直接お寺を造った方も末松の土地にお寺があるべきだと考えた人も、対岸から資金も人もお金も持ってきたのだと、こう考える方が適当だと思います。ですからそれは吉岡先生が冒頭に東アジアとの関係で、660年ごろのことをレクチャーなさいました。そういうことからすれば、まだ中央の威令は地域に及んでいなかったと、地方地域に及んでいなかったと考えれば、これは関東の例もそうでございますし、全国的に考えれば何も日本の国境の範囲内で考える必要はないと思いま



Fig-13

す。

それは服藤先生もおっしゃいました。どうも我々は、近世や現代の常識で想像で古代を推し量っているわけです。金田先生がおっしゃったように、レーダー探査を活用して、それから県なり土木事務所に行けば耕地整理の原型は復元できるのではないかと。そうなれば、何故末松の地にお寺を造ったかということのヒントには、もっと迫ることができるように思います。ですから歴史博物館を作る必要はありませんので、シンポジウムを毎年やっていただいて、中世史の方も、それから農政関係の方も、それから加賀藩の農政関係の資料も、もっとアクセスすべきなのではないかと思います。以上でございます。

吉岡 ありがとうございます。非常に広い視野の中で末松廃寺を捉えていかなければいけないのではないかというお話でございました。もうお一方どうぞ。

質問2 今ほどの方のように、学問的なことは私には全く分かりません。ただ私は今このシンポジウムを聞いていて、この五重塔はシンボルではなくて、灯台かまたは物見櫓の要件を適えていたのではないかと思いました。それは尾山神社を港の浜から銭屋五兵衛が灯台として使ったように、何十メートルの高さがあれば、先ほど言われました大川まで手取川が流れていたということであれば、当然手取川も水路として使っていましたから、灯台なり、または今の朝鮮半島から攻めてくる敵を見るためにも必要な物見櫓であったのではないかという気がしますけれど、どのようにお考えでしょうか。

それともうひとつ、木立先生におうかがいしたいのですが、羽咋市の柳田にこの時代にお寺があって、それも朽ちかけたというか全く形がない状態になっていますけれど、これは大伴家持が能登の国司に来た時に、氷見から山を越えて来たら、波の向こうに竹の港が見えた。その竹の港の右側にあたる場所にお寺があったはずですよ。ですからそれも私は灯台なり、物見櫓を兼ねていたのではないかという気がします。柳田のシャコデ廃寺というのは、いつ頃絶えたものなのでしょうか。それをちょっとお聞きしたかったのでお尋ねします。

吉岡 木立さん、お願いします。

木立 柳田のシャコデ廃寺は塔の心礎が末松廃寺の系譜のもので、塔が建ったのはほぼ同じくらいで、瓦の時期がよく分かりませんが、おそらく白鳳時代の終わりくらいに、末松廃寺よりもちょっと遅れて建っているだろうと思います。いつまで続いたかというのは、実はあそこは圃場整備がされていて遺物の痕跡があまりないのですが、それでも塔の心礎の跡に平安時代の終わり頃、10世紀か11世紀くらいの土師器が埋められていました。それがどうも非常に宗教的な埋められ方をしていますので、やはり末松廃寺と同じように平安時代

いっぱいは何らかの宗教的な対象になっていたのだろうというように思います。すぐになくなっていくわけではないです。灯台のようにあるというのは、やはり、そういえばそうだなあというように確かに思います。

村上 物見櫓の話ですけど、実は塔は上にあがれないのですね。1階は人が入れるようになっています。上は木組みが複雑で、床は何もないのです。我々も調査に上がりますが、行こうと思えば行けますけど、お城の天守みたいな感じではないということです。シンボリックなところがあると申し上げたのは、そういうところでございます。近世になると上がれるところもございしますが、古代はそういうことはないと思います。あの構造的にどうしてもあがれない状況でございます。

吉岡 ありがとうございます。石川平野の日本海を航行する船からは、あの塔は見えただけですね。そういう点ではサーチライトは出ないかもしれませんが、非常に驚きをもって土地に住んでいる人も船行く人も見たことは確かだろうと思います。まだ後半の方で若干ご質問をいただきたいと思いますので、お待ちいただけたらと思います。

それで、一旦中断をして8世紀の中頃だろうと思うのですけれども、小さくなっておりませんがもう一度もとの金堂の場所に金堂を建てています。そして東の方の塔の跡には、もうひとつはっきりしないのですが、その周りから瓦塔という土製の高さ2メートルくらいの塔の破片が散らばっていたのです。だからこれも偶然ではなく、やはり塔は朽ちていますけれども、その場所に塔のミニチュアを置くということで堂と塔を配置しています。そして北の方にはもうひとつお堂なりの建物を土塀で囲うような様子もみられます。これもなかなか当時としては立派なお寺なのですね。

この金堂が再建されるわけですが、この金堂にからんでは、やはり高村さんがお話になりました、お父さんの見つかった和銅銀銭、これが非常に大きな意味を持っております。和銅銀銭については会場内に津幡町から芝田さんが見えにしているかと思うのですが。少しご説明をいただけますでしょうか。



Fig-14 瓦塔破片（末松廃寺出土）

芝田 津幡町の芝田です。今日は金田先生の基調講演をはじめとし、また各先生方の末松に関わるお話を頂戴いたしまして大変勉強になりました。

私は、今ほど吉岡先生から和同開珎と関係するお話をとられましたけれど、末松廃寺の

銀錢を、もう三十数年前ですか、高村誠孝さんのお宅へ訪ねた折に初めて拝見いたしました。皆さんのお手元の本の表紙にもありますけども、黒くて穴が開いていて、銀の発色がなくて、これが銀錢かなという印象を持った、そういう記憶が残っております。それ以降、和同開珎の調査に際しまして、しばしば高村さんのところへ応援なり、お世話になってまいりました。



Fig-15 和同開珎銀錢（末松廢寺跡出土）

2004年に、私は和銅銀錢の全国調査をい

たしました。その折に発掘調査で発見されました銀錢は、28箇所、数で48枚でしたか47枚でしたか数えられました。それらは先ほどからお話が出ていますけれど、大和を中心にして畿内周辺にたくさん出ております。北の方は秋田から、あるいは千葉県、私どもの加賀からは2枚ですね、当時は越前国ですけれども。西の方は出雲ですか、島根県。そういう地方に散発的に分布しておりました。それらの遺跡は特権階層に関わる遺跡です。

今日は末松廢寺の寺院でありますから、寺院に限って見てみますと、奈良県の室生寺の塔跡の真下から出てきておりますし、また同じく坂田寺の須弥壇の地下から出てきております。西大寺からも出てきておりますけれども、やはり有名なのはその本の資料の中にもありますけれども、小治田安麻呂墓です。あそこから10枚ばかり出てきています。これらは貨幣ではなくて、意図的に埋められた呪物として使われていた代物でございます。

和銅銀錢は皆さんご承知のように西暦708年5月に作られておりますけれども、その後に銅錢が作られております。1年としばらく、3カ月ほどですか、709年の10月に、8月でしたか、鑄造がやめられます。これは一般には私鑄錢が横行したと、いわゆる偽金が出回った関係上やめたというようなことを言われてきましたけれども、実際は当時の律令政府の貨幣政策の一環で鑄造を廃止しております。それは、貨幣システムの関係で銀から和銅、銅錢に変えるという、そういうシステムの変換で和銅銀錢が作られてきたわけなのです。橋渡し役ですね。そういうことで短期間で鑄造がやめられています。それ以降も作られた、または使われていた形跡はありますけれども、政府の一環でやめられています。

今お手元のこの資料の表紙にありますけれども、この和同開珎のタイプが大きく2つに分かれます。書体と形態の差で2タイプあるのですけれども、「開」の字の門構えを見て下さい。これは隸書体ですね。これと普通の門構えと2通りの和同開珎があるのです。末松廢寺で出土した銀錢は、いわゆる隸開和銅というものでございます。私の分類からいたしますと非常に新しい、そういう部類に入ります。

先ほどから金堂の再建の話が出ましたけれども、高村さんのご報告では金堂の西側の用水

から発見されたというようになっております。吉岡先生のお話を聞いていますと、瓦溜りから出てきたというようなことで確認しておりますけれども、この和銅銀銭の出る遺跡はやはり経済外的といいますか、呪物という、そういう使われ方が往々にしてあります。特にこの加賀地方ではそういう行為がたくさん見られます。そういう関係を考えてまいりますと、この末松廃寺の銀銭はどうも8世紀の、この第一四半期に再建されるというように考えますと、そういうところが非常に関係するのではないかと考えております。推測の域を出ませんけれども、再建時に使われたような銀銭じゃないだろうかというように思っております。

創建とはあまり関係はないかもしれませんが、いずれにしましてもこの和銅の銀銭の発見は、今日のこうした末松廃寺の解明につながった原動力のひとつではないかと考えておりまして、大変すばらしい重要な発見であったというように思っております。以上です。

吉岡 ありがとうございます。芝田さんは石川県をはじめ北陸のお金をつぶさに調べていらっしゃるわけですが、今のお話だと大和は首都圏ですので銀銭が流通したところですが、それを除くと8つの県でたった24枚しか発見されていない。そのうちの5枚は東アジアの帝国であった唐の長安城の穴倉に宝物を入れてあったわけですが、そこから見つかったものを入れても、それだけしか出てないというものなのですね。今お話がありましたように、高級官僚のお墓の副葬品に入れてある例もありますが、どうもこの従来謎とされてきた銀銭は、誰がどう持ってきたかまでは分かりませんが、末松の大寺の金堂を再建する時に、地鎮祭に使ったのではないかとというように考えられないでしょうか。

また、末松廃寺からは字を書いた墨書土器が出土しておりまして、10世紀の初めくらいのものですが、朱仏寺と書いてあるのですね。赤い仏様。どうでしょうね。赤い仏様から何かこう、連想される場所というのはあるのですかね。これは創建時の話に戻ってしまいますけれども、創建の金堂にも仏様は当然いたわけですね。村上さん、創建金堂の本尊として、想像されるのはどういう仏様でしょうか。

村上 吉岡さんに以前お会いしたときに、仏像、本尊は何かということで、私も専門じゃないので、慌ててももの本を読みますと、やはり飛鳥時代も朝鮮半島を経て大陸の様式が伝わって、建物と一緒に白鳳時代は中国から直接そういう形式が伝わったということです。かなり白鳳と飛鳥では形式が違う。仏様の様式が違うと。

この写真でお見せしているのは、6世紀末から7世紀初めの飛鳥寺の本尊でございます。金銅製の釈迦如来坐像で、もとの中金堂の、3つある一番北の端にあります金堂の原位置に座っているとわれています。何回か火災に遭っていますので下の方はもう新しくなっていますが、顔なんかは当初のままある。もともと三尊だったのが両脇侍がなくなっているということです。表面は平べったいといいますか、非常に日本的ではない大陸的な感じの顔

をされています。

白鳳時代になりますと、もう少しふっくらとした仏像になりますので、そういう仏様が入っていた可能性があります。ただこれは飛鳥時代は釈迦如来とか、法隆寺の近くにあります中宮寺に弥勒菩薩というのがありますが、そういうものが中心だったのが、白鳳時代になりますと阿弥陀仏とか薬師如来とかそういうものがかなり多くなってきた。そういう経過もありますので、ひょっとすると阿弥陀さんかも分からないし、全然分からないです。法隆寺の金堂も薬師、釈迦三尊です。ですからどういう本尊がお祀りされていたかというのは、なかなか分からないです。

吉岡 お話のあった飛鳥寺は蘇我馬子が最初に建てた日本で一番古いお寺でありますけれども、その後何度も兵火をくぐって、頭のあたりは比較的よく残っているようですが、満身創痍という状態の継ぎ足しだらけです。今現地に参りますと、あの壮大な飛鳥寺の伽藍の金堂が安居院という小さなお堂になって残っているのは、飛鳥に行かれた方はご覧になったかと思います。なかなか本尊も難しいところであります。

こういう金堂、仏塔と堂塔が2つ並ぶような形というのは、望月さん、小松の方ではわりあい最近の山寺なんかでも出てきておりますね。

望月 はい、そうですね。最近8世紀の第二四半期くらいの、松谷寺という中宮八院の調査をしていたら、偶然古い時期の山林寺院が出てきました。それはもう同社ひとつしか確認されていないのですけれども。

吉岡 この末松のお寺の場合には誰がということははっきりしないのですが。上林、新庄という町で区画整理関連の調査をなさった時の大きな遺跡がありまして、その北の方に下新庄アラチ遺跡というのがあるのですね。そこの一番奥まったところに郷の、拝師郷の郷長の館と考えてまず間違いのない立派な館跡がみつかっております。それから溝を挟んでその配下の、あるいは主のようなものまで含めたような、そういう大家族的なエリアが確認されているわけなのです。小松の方で財部寺と書いた墨書土器が出土していますよね。



Fig-16 須恵器墨書土器

望月 佐々木遺跡というところで発掘調査をした時に、財部寺という墨書土器が出てきました。その須恵器の杯に書いてあったのですが、その須恵器の杯自体

は9世紀の初頭くらいだというように考えています。ただしその遺跡からは油煙痕の付いたようなものは一切出ておりませんし、仏教関係のものも一切出ておりません。ですから集落内に仏教行事を行ったような、宗教的な施設というのは想定できないのです。

それで私の考えとしては、すぐ横で木立先生のお話にありました千代オオキダ遺跡の調査を行ったときに、軒丸瓦が出てまいりました。それが白鳳期の瓦です。多分、十九堂山遺跡という、吉岡先生が調査された遺跡ですけれども、そこが加賀の国分寺推定地になっているのですが、そこからも白鳳期の平瓦が出ているのです。その国分寺の前身となる寺があこの山の上にあって、私はそれを財部寺と思っていたのではないかと考えています。先生の今日のお話とかみ合わないかもしれませんが、財部のその勢力が作った寺が能美平野の高台にあって、その軒丸瓦は大阪の高井田廃寺というところの系統のものであり、平瓦は尾張の方の特徴がある平瓦です。そういうことで財部寺という文字から見えるのは、そこに宗教施設があったというよりも、そこから望める高台に非常に大きなお寺があったのかなとイメージしております。

**吉岡** 財部は先ほどから話が出ていますように、能美地域を地盤にした財部造のことですね。タカラというのは大化のクーデターの時に蘇我入鹿が殺されるのを目の前にしていた、あの中大兄皇子、後の天智天皇ですね。その宝皇女と呼んでいた皇女時代の私有民、部民に由来しているわけなのです。

それはともかくとしまして、律令時代に入りますと郷長にもなっているようなのです。末松のお寺も下新庄あたりの郷長がちょっと離れますけれども、寺の管理をしていた可能性も考えられます。そこで法要を営んで、もうこの時代になると村人たちが集まって、そして郷長が中心になって営まれる法会というのは聞こえはいいわけですが、郷長たちが稲の前貸しをすとか、あるいはいろいろな物資の取引をして、利益を上げる、そういうものもある程度一般の人にも納得してもらうようなお説教をするというか、そういう場でもあったのかなという気がいたします。

このへんはまだまだ問題が多いわけですが、だいぶ時間もまいりましたので。それでは最後に少しこの時代の女性について、服藤先生におうかがいしたいのですが。今日は服藤先生のお話を聞かれて、うーん、これはその、奥さんが今でさえ非常に強いのに、古代はまだまだ強かったのだという話になると、これは大変だなと思われた男性も多いのではないかと思うのですけれど



Fig-17

も、その頃の結婚などはどうだったのでしょうか。

**服藤** 先ほどはあまり時間がなくて触れることができなかつたのですけれども、80ページの資料の2をみてください。これは間違いなく正位は父兄でお父さんの方がお嫁さんをもっているのだけれども、婚姻形態は男性が女性のところに来ている、そういう状況なのですね。こういう地方の豪族でもそうであるというように思います。

もうひとつ言いたかったのですけれども、調べてみなすと日本においてはまだ9世紀の前半くらいは豪族の家というのは家の主、家君と家の刀自ですね、家君と家の刀自というペアが豪族の経営と家財管理をしているというようにいわれているのです。この刀自というのが、この地域で墨書土器とか木簡に出てくるというようにおうかがいしましたけれども、実は7世紀までは刀自と刀禰がペアで地域の首長層だったといわれているのです。刀禰というのは律令国家になりますと役人の総称、男性の役人の総称を刀禰というのです。ところが刀自というのは、公的な役人にはなれません。公的な政治の場からは排除されて家の統括者となって行って、家にだけ残る。それが刀自だといわれているのです。でも今でも地域によっては女性の有力な人を刀自という地域もあります。そういうような状況ですので、ちょうど9世紀くらいまではまだ地域では婚姻形態も含めて女性が男性と対等に近い形で首長的な役割や、その次には家の、豪族の家の切り盛りもしていたのではないかと。そういうことを踏まえて考えると、別に女性が強くなったわけでは決してなくて対等だった。対等だったと申し上げているだけなのです。吉岡先生、ご心配なさらなくて結構だと思います。本当は対等の方が、お互いに対等に話し合える。もっともっといい社会を作っていけるのだと私は思っているのです。

それからもうひとつ。先ほど計帳のところと言おうと思っていて忘れてしまいましたが、日本はずっと夫婦別姓なのですね。北条正子は源正子になりませんね、源頼朝の妻ですけれども。それが明治時代になって、民法で初めて女性が夫の家に入ったら夫の家の名前を名乗らなければいけないという法律ができるのです。だからむしろ夫婦別姓が長い伝統であり、それから家の中で女性が家を統括するのも長い伝統である、そういうような社会があったのです。そのへんをもう少し力説しておきたいというように思います。対等な社会になりましょう。すみません、長くなりまして。

**吉岡** いえいえ、ありがとうございます。会場でどなたかさきほどお手をお上げになった方がおられると思いますが。

**質問3** 私はその当時高校生で、調査に足手まといだったかもしれませんが一緒に参加させてもらいました。生涯忘れません。思い出になりました。

私は、塔に関してはさきほどどなたかもしやいましたが、シンボルとかそういうものではなくて、やはり宗教的な舍利を納める対象物だと思います。シンボルというのは飛躍しすぎて、やはり信仰がものをいう時代だと思います。だからこそ未完で終わったのだと思います。未完といいますか財力が難しいです。国家でもなかなか難しいのに、寺院ですからなかなか今の世の中のように難しいと思います。

疑問なのは、元文化庁調査官の宮本長二郎さんが設計された100分の1の模型を見ますと、回廊といいますか板塀の配置がすごく偏っているでしょう。先ほど吉岡先生もおっしゃいましたが、塔と金堂の間隔はいいのですけれども、塔と回廊の間が空いているのはどうしてだったのかお聞きしたいのです。

吉岡 これもなかなか難しい問題ですが、時間が残り少ないので。では、かいつまんでお願いします。

村上 例えば42ページの法隆寺の図を見ていただきますと、やはり塔の方が回廊より少し離れています。塔と回廊の間が広いというような傾向もあります。よく分からないのですが、どうしてこうなっているのか。法隆寺も少し間が違います。

先ほどシンボルと申しましたが、シンボルというのは8世紀になって金堂の仏様がいる中心から塔が外へ出てしまっ、舍利も置かなくなって、シンボリックになったのではないかと思います。例えば末松の塔というのはやはり何らかの形で舍利を置いた、信仰の対象になっていたのではないかと思います。それはもう間違いのないと思います。後の時代になって舍利を納めなくなって、シンボリックに外へ出てしまったという言い方で、ちょっと舌足らずだったのですけれども、そういうことになります。

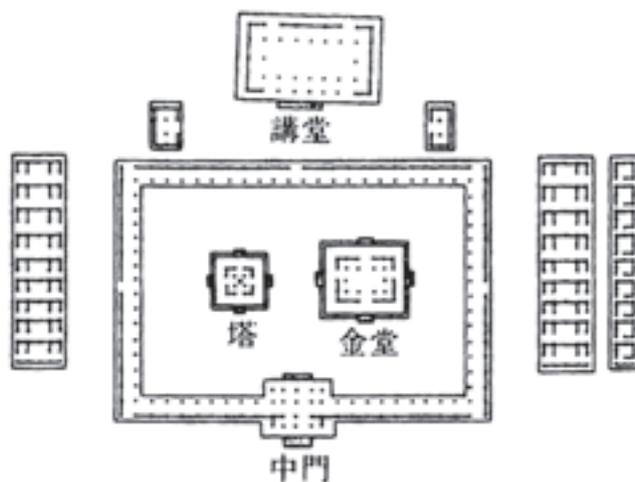


Fig-18 法隆寺伽藍配置図

吉岡 ありがとうございます。

村上 確かに古代の記録によりますと、金堂が先に建ってまして、それは4～5年以上はかかります。やはり金堂の工事は終わったけれども、塔の工事にかかった時に何らかの事情があったのではないかと思います。

吉岡 はい。どうも長時間ありがとうございました。

それでは最後に、先生方から一言ずつ野々市市を目指しているそのまちづくり、あるいは町民の皆さんへ、本当に簡単なひと言で結構ですので順にいただきたいと思います。服藤先生にはこちらからの注文で申し訳ないのですけど、最近女性天皇という話が出ていますが、先生のお考えに最後に触れていただけたらと思います。では、金田先生からひと言お願いします。

金田 私は、こういう末松廃寺のような立派な遺構がある地域というのは、他にもないわけではないのですが、これはやはり恵まれた存在でありまして、自分たちの地域の過去の姿がこういう明確な形で残っているというのは、大変素晴らしいことだと思います。それを位置づけてその地域の由来に思いをいたすとともに、それがおそらく地域の未来に思いをいたすことにもなると思いますので、是非ともそれを大きなプライドとして、大きな誇りとして地域として守り育てるような方向でお考えいただいたら、研究者としても大変うれしいと思います。

村上 40年前に20代で発掘した者として、報告書ができたということで今日のシンポジウムが開催されたということは、大変ありがたいことだと思います。当時はまだ大学を出たばかりで右も左も分からなかったのですが、やはり今日のシンポジウムのお話を聞くと、手取川扇状地の意義というのは非常に大きい。末松廃寺だけではなくて、全体が非常に大きいと思っています。これから調査もいろいろ進むと思いますので、地下に埋まってはいますけれど、地元の宝でありますので、そういうものを大事にする意識、地元の歴史を愛する心を持って、今後も町を育てていっていただければというように思っています。どうぞよろしくをお願いします。

木立 今から20年近く前になるのですが、『北陸の古代人』という本を作っておりまして、その中で西井龍儀さんという富山の方と一緒に、寒かったですので雪の降る中でしたが、雷も鳴るのですが、報告書の締切りに間に合わせるために一生懸命、塔の心礎の実測に行きました。夜暗かったのですが、雷が鳴るので時々ふたりでかがんで雷を避けながら、雪をかきわけて塔の心礎を実測していたら、後ろからふっと声をかけられました。「あんたら何しとるんや」と。確かに怪しいですね。夜中の雷の鳴る中、男2人が塔の心礎の周りでうずくまっているんですね。「これこれこういうことで、ちょっと実測させてもらってるんです。野々市町の吉田さんに連絡取りました」というと、「ああ、そうか」と言って安心して帰っていかれたのですが。地元の方の見回りで、どうも怪しいやつが末松廃寺に入っていると。お前らいったい何をしているんだとって心配して来られたんですね。

いろいろな史跡へ行きますけれども、怪しい人間はいっぱいいますが、そんな形で地元の方がきちんと見回りに来られるというのは本当に私には初めての経験でした。でもよく考えたら本当に怪しかったのですけれども。その後普通ですと「お前ら何やとるんや」と言われるとむかっとくるのですが、その時は「ああ、おっしゃるとおりですね」と思いました。皆さんが本当に末松廃寺を大事にされているということがよく分かりました。その後長い時間がたって、野々市町が頑張って報告書を出せるというのも、40年たって本当によく出せるなと思うのですが、やはり皆さんが応援するという力もあったのだらうなという気がします。このままずっと応援し続けていただければ幸いです。

**望月** すぐ近くの市町の間が、野々市町にコメントというのもちょっとなんなんですけども。思ったのは、町ぐるみで史跡というものを非常に大事にしているなという思いです。御経塚遺跡もそうですし、この末松廃寺もそうですが、非常に重要な遺跡がこの野々市町にあって、それを町の皆さんがとても大事に思って保護しようとしている。今の木立さんの話にもありましたけれども、見回りとかですね、そういう町の人たちが大事にしているのは非常に感じました。

今日はこんな天気だったのでそんなに集まるのかなというように、事務局の方で心配していたような声も聞いたのですが、実際にふたをあけてみるとほぼ満員状態で、やはり多くの方々がかうやって興味を持って集まってくれるというのは、すごい下地があるんだなというように思います。是非とも毎年シンポジウムを開いて、歴史博物館を作って、どんどん野々市市に向けて盛り上げていったらいいなというように思います。

**服藤** こちらのことは何も分からないのにお招きいただきましてありがとうございます。最初から私はちょっと違和感があったのですけれども、歴史というところ女性のお客さんが多いのです。私は東京に住んでいるのですけれども、東京や近辺で講演させていただくと、私の専門が女性史だということかもしれませんけれども、シンポジウムでも最近女性が多いのです。けれども、今見ましたら私と同じか、私よりちょっと上かなと思われるような男性が大変多い。もう少し女性も多く参加して欲しい。それからもうひとつ、若い人がいない。せっかくのこういう良い郷土の歴史があるのに、次につなげていく、そのためにはやはり活用しなければいけない。女性と子ども。そういうのがもうひとつ、こんな素晴らしい遺跡を持っている地域の課題ではないかと思っておりますので、できましたら10年後私も頑張りますので、10年後は72歳になっておりますけれども、10年後のシンポジウムにお呼びいただきまして、そのときには女性が半分ぐらい、若い子が半分ぐらいいるようなところにしていただければいいなというように思います。

最後に女帝のお話をということですが、私は当然ながら日本の伝統は先ほど申し上げまし

たように、女性は決して中継ぎではない。これは世界でも大変珍しい、古代の女性がきちんと男性と対等な形で権力行使をしてきた、そういう社会だったのですね。それをもっと生かして、女性の天皇でもいいじゃないかという、天皇制はどうするのかという、そういう深い問題は抜きにしておきまして、是非そうしないと、女の子しか産めなかった時にはどうするのですか。もう本当に何千年でもないのですけれども、男を産まなければいけないという女性に課せられたあの封建的な意識が今の社会でもまだ残っている。そういうことはやっぱり私たち、国民が考えなければいけないのではないだろうかと思うのです。ですから、せめて女性の天皇を認めていいのではないかというように思っています。それは私の感想ではなくて、古代の女性と男性の天皇を見たときに、そういう結論が導き出されるのではないだろうかと思います。すいません、私ひとりが苦言を呈してしまいました。

**吉岡** ありがとうございます。75歳のおじいさんが下手な司会をやったものですから、大幅に時間を超過してお疲れだったことと思います。それでは本日のシンポジウムはこれで終わりにさせていただきます。ご来場ありがとうございます。

**司会** 吉岡先生、パネラーの先生方、本当にありがとうございました。

# ふるさと歴史シンポジウム いまよみがえる末松麿寺

パネルディスカッションの記録

発行 野々市町・野々市町教育委員会

〒921-8510 石川県石川郡野々市町字三納 18 街区 1 番

Tel 076-227-6122 / Fax 076-227-6258

E-Mail : [bunka@town.nonoichi.lg.jp](mailto:bunka@town.nonoichi.lg.jp)